

# 新政の胎動

# 胎動

銀座書房  
トツレアンパ

阿武隈次郎著  
近衛公の苦悶と  
末次塩野兩相  
の動さ！その他

100  
SEN

特255  
640

1



0004744-000

特255-640

新政党の胎動

阿武隈次郎・著

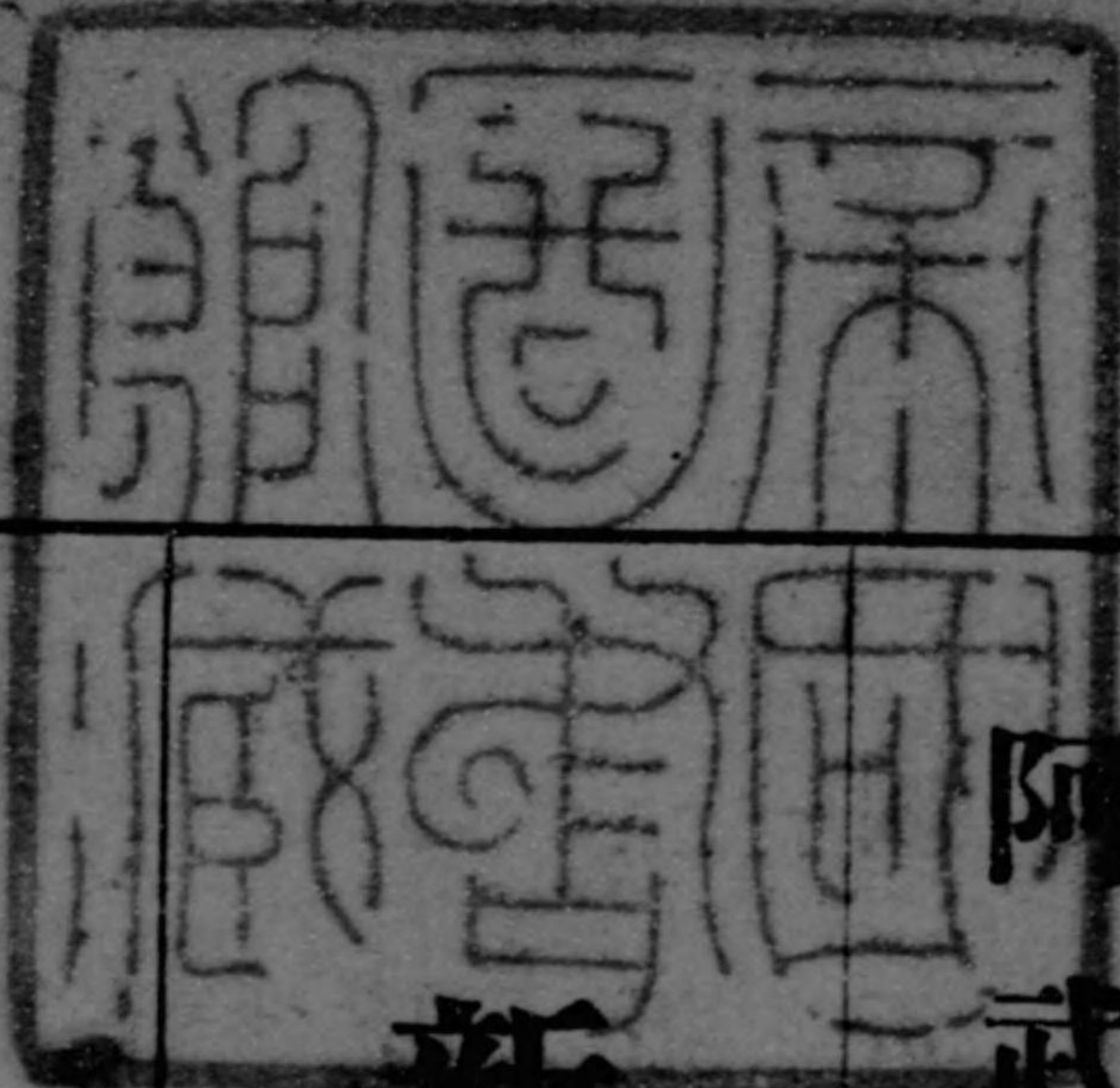
銀座書房

昭和15

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特 255  
640



阿武隈次郎著

新政黨の胎動

銀座書房版



## 内 容

- 一、新黨運動は政界の蜃氣樓か……………(一)
- 二、既成政黨の新黨割込み運動……………(六)
- 三、近衛公出馬説と政黨の旋回運動……………(一〇)
- 四、近衛首相の苦悶と末次、鹽野兩相の動き……………(一八)
- 五、新黨は果して樹立されるか……………(三三)

## 新 政 黨 の 胎 動

阿 武 隈 次 郎

### 一、新黨運動は政界の蜃氣樓か

新黨樹立の噂は常に政界の闇を縫つて明滅して居る。新黨結成の機運らしいものが頻りに動き始めて、今にも待望の新政黨が樹立されるかと思つて居ると、いつの間にか新黨の噂は忽然として煙の如く消え去つてしまふ。さうしてもう全く新黨の話は消滅し去つてしまつたのかと思つて居ると時期を見て又忽ち再燃して來る。新黨問題は實に現在のわが政界に於ける長い間の重要な宿題であり、而して又容易に解決し難い難問である。或る人はこの新黨運動を以て

政界の屢氣樓にたとへて居る。遠くから見ると堂々たる樓閣に見える。然し側に近寄つて見ると忽然として消えてしまふ。まことに屢氣樓の如く捕捉し難い存在であると云ふのである。穿ち得て妙を極めた批評であると云へやう。

抑も新黨運動が政界の話題として表面に現れて來たのは、廣田内閣の末期頃に於ける有馬伯邸の會合、所謂荻窪會議が頻々として開かれた頃に初まる。當時此の會合には政黨方面の前田米藏、中島知久平、山崎達之輔、永井柳太郎、櫻内幸雄の諸氏、財界方面の結城豊太郎氏、軍部方面の林銑十郎大將、官界方面の後藤文雄、小原直の諸氏が參加して居り、其の顔觸は比較的純眞な分子を網羅して居り、革新的の氣分に充ちて居たので頗る注目されて居た。而して此の連中は近衛公爵を擁立して、時代に適應した眞の革新的な新政黨を結成せんとして、其の下準備にとりかゝつて居たのであつた。之が順調に進捗して居たら、今頃は新黨は出來て居たかも知れない。然るにその機運が未だ充分に熟しないうちに、時の廣田内閣は寺内陸相と濱田國松氏の例の腹切り問答がさつかけとなつて、突然瓦解してしまつた。之は新黨運動にとつて

最初の一頓挫であつた。廣田内閣の次には林内閣が成立した。林大將は荻窪會議の一員であり革新政治の推進力とも云ふ可きかたちをとつて居る軍部との關係もあり、胸中に新黨結成の計畫を有して居たこと勿論であつた。然し林大將は結局一個の軍人であつて政治家ではなかつた。彼の政治的技術は拙劣を極めた。さうして其の結果は却つて新黨結成の機運を自ら破壊するやうな事になつてしまつた。之が新黨運動の第二回目の頓挫であつた。即ち彼は組閣の當初に當つて其の處置を誤り、十河一派の大陸派の革新分子と阻隔してしまひ、又一方政民兩大政黨とも感情的對立を來してしまつた。

こうした情勢の下にあつて彼は近衛公を中心とする新黨の結成を計畫したが、近衛公は勿論出馬の意志なきことを明かにして之を拒絶した。彼は次いで廣田前首相を擔いで新黨を結成せんと試みたが、廣田も政黨入りをするの意志なきことが明かとなり之も失敗に終つた。こゝで彼は窮地に陥つたが、かねてからの彼の立場もあり、又革新政治の推進力となつて居る軍部方面の意嚮も阻止し得ず、遂に彼は意を決して第七十議會の解散を斷行し、之を機會に自ら中心

となつて新黨結成をはからんと最後の手段に出た。然し此の解散前後の處置も又拙劣を極めた爲め、自分の味方となる可き筈の、既成政黨内の革新分子をも正面の敵とするやうな結果となり、遂に僅かに昭和會や右翼團體の一部を味方として、局面打開をはからんとするやうなあはれな状態に陥り、政局を益々混亂に導き、種々の策謀やデマが亂れ飛ぶ有様となつた。こゝに於て眞面目に新黨結成を考慮して居た分子は、次第に新黨運動から遠ざかり、林首相が新黨結成に努力すれば努力するほど、新黨結成の機運は次第にうすれて其の姿を没するに至り、林内閣は無残な最後を遂げてしまつたのである。

次いで近衛内閣が輿望を負うて登場した。此の時近衛首相に課せられたる使命は、林内閣の後をうけて、國內の摩擦と相剋を緩和し、政治を一定の軌道にひきもどすことであつた。そこで近衛首相は各方面の勢力と圓満なる協調をはかる方針に出た、革新的な分子も既成政黨の代表者も官僚のエキスパートも之を閣内に包含して、其のリーダーシップをとり、巧みに之を指導して行く方法をとつた。近衛首相の聲望と其の洗練せられたる政治的手腕とはこれに着々成

功した。政黨は一致して近衛内閣を支持する態度をとつた。こゝに於て新黨結成の機運は更に一層うすれて來たのである。既成政黨が一致して近衛内閣を支持し、其の政策を承認する以上新たに新黨を結成する必要は事實上無くなつたのであり、又國內の摩擦と相剋とを緩和することを其の使命とする以上、新黨組織に積極的に働きかける事は、國內の摩擦と相剋とを却つて益々激化せしむることとなつて、使命に反することとなるからである。新黨組織の意志はないと云ふ事が、閣内から當時しばしば放送されたのは誠に當然なことであつた。こゝで新黨樹立の機運は一時全く消失してしまつたのである。然るに突如として支那事變が勃發した。近衛内閣は此の未曾有の非常時に際して、全責任を双肩に擔つて、國難突破に邁進しなければならぬ事となつたのである。こゝに於て近衛内閣は、單に國內の摩擦と相剋とを緩和すると云ふやうな消極的な立場から、更に一步を進めて、積極的に眞の舉國一致の體制を整へ、内閣を強化し以て事に當るの必要に迫られて來た。さうして其れが爲めには、單なる形式的な協力ではなく強力なる指導勢力を結成し、之に依つて積極的な國民的支持を確立する事の必要が痛感され

て來た。そこで再び新黨結成の機運が擡頭して來たのである。今議會の前後に於て、新黨結成の運動が再燃し來り、政界の話題を賑はした所以はこゝにある。

## 二、既成政黨の新黨割込み運動

以上は大體に於て、政界の上層部に於ける進歩的な分子の、新黨樹立問題を中心としての動きと其の経過であるが、此の外に此の運動に呼應して、之に外部から割り込み便乗しようとする種々の運動が、既成政黨の連中に依つて行はれて來たのである。其れ等の既成政黨の連中のうちには、眞に時勢に目醒て新黨樹立の必要を認め、之に参加せんとする者もあつたが、同時に次期政權にタッチする手段として、依然たる政權病にかられて新黨に参加せんとする分子もあつたし、又行詰れる自分達の政治的立場を打開し、其の政治的生命の延命策として之に割り込まうとする者もあつた。其れは所謂玉石混淆の有様で、かうした連中の策動が却つて新黨運動を不純化し、世間の反感を招くやうな結果を來して、眞面目な新黨運動に暗いかげを與へた

事も少くはなかつたと云へよう。

既成政黨の政治的支配勢力と云ふものは、五・一五事件を契機として、失はれてしまつた。さうして政黨は政權の中心圏外に放逐されてしまつた。五・一五事件以來齋藤内閣から現在の近衛内閣に至るまで、舉國一致内閣が組織され、政黨は之に僅かに一名か二名の閣僚を送つて伴食的地位を占める事に依つて、辛うじて其の存在を示して居るに過ぎない状態に陥つてしまつた。之は政黨の過去に於ける不信行爲の累積が遂に全國民の信用を失つた事に起因するものであるが、又一方に於て彼等の國策に對する無智と無定見が、時勢の急激なる變化の前にあつて、遂に置き去りを食ふに至つた結果でもある。こゝに於て政黨は何とかして其の國民的な信用を回復し、其の勢力と權威とをとり戻す必要を痛感し、或は自肅自戒を説き、或は政黨の更生を提唱しあらゆる努力を試み初めたのである。然し之等の試みは殆んど悉く失敗に終つてしまつたと云つてよい。一般國民の政黨に對する信用は、こうした既成政黨の付焼刃的な自肅自戒などに依つて容易に回復されなかつたし、又いくら政黨の更生を叫んで見ても、時局を指

導するに足るだけの政策を持ち合せぬ既成政黨としては、その勢力と權威と云ふものを保持する事は出来なかつたのである。そこで窮した既成政黨の連中は、あはよくば問題の新黨に割り込み便乗して、局面の打開をはからうとし初めたのである。

近衛内閣が其の組閣當初に、國內の摩擦と相剋とを緩和し、政治を一定の軌道にひきもどす方針をとつた時、各方面の勢力は悉く近衛内閣を支持する態度をとつた。民政黨も政友會も社大黨も其の他の小會派も總て近衛内閣に反対はしなかつた。そこで近衛内閣としては改めて與黨を持つ必要もなく殊更に新黨を結成する必要もなく、新黨運動のかけは一時消え去つてしまつたことは前述の如くである。

然し其の當時に於ける政民二大政黨を初めとして各既成政黨の内面的な煩悶と懊惱とは深酷なものがあつたのである。近衛内閣としては一舉手一投足の勞なくして、各政黨の支持を得て居るのであるから、こんなよい事はないであらうが、時勢に引き摺られてやむを得ず形式的に近衛内閣支持の態度をとつて居る各既成政黨としては、さうした状態がいつまでも續いて居

ては、遂に政黨は無用の存在となり、權威を失墜し、土崩瓦解するの運命に陥つてしまふかも知れない。何とかしなければならぬ。此のまゝではならぬと云ふ焦燥の感にかられない譯にはいかなかつた。さうして當時内閣から新黨結成の必要なしといふ事が放送されたのに反して、既成政黨の内部に於ては行き詰れる既成政黨の局面打開策としての新黨運動が頻りに行はれ初めたのである。

政友會に於ては昨年の夏頃に、宮田光雄氏等に依つて現状打開が提唱された。さうして此の一派は場合に依つては政友會を一旦解消すべしとまで極論するに至つた。更に其の後政民兩黨の有志の懇談會と云ふ形式をとつて居る常磐會の一派に依つて政民兩黨の合同論と云ふやうなものも持ち上つて來た。此の際兩黨を解體して無條件にて合同せよと云ふ意見である。こうした意見をめぐつて兩黨の有志は、しばしば丸の内の常磐に會合した。

其の顔觸は民政黨の富田幸次郎、俵孫一、政友會の宮田光雄、川村竹治、濱田國松、東武と云ふやうな人達が其の主なるものであつた。然しこうした人達の政民合同論は同じ合同論であ

つても各自其の目的を異にして居た。或る者は政民合同に依つて、既成政黨の勢力を回復せんと考へ、或る者は政民合同して其の黨首に宇垣大將を擔ぎあげ、あはよくば次期政權を掌握せんと考へると云ふ有様で、表面はとも角其の肚の中は一致して居なかつた。従つてこうした運動はいつの間にかうやむやに終つてしまつたのは當然な事と云へよう。尙ほ其の後宮田光雄氏一派の運動は引き続き行はれ、今議會中に於ても有志はしばしば會合して、新黨運動に對して種々のヂエスチユアーを示して居るが、然し之等の運動と、眞の新黨運動の主流との間には、まだ大きな距離があると見られて居るのである。

### 三、近衛公出馬說と政黨の旋回運動

支那事變が勃發して、いよいよ準戰時體制から純戰時體制の時代に入り、名實共に舉國一致以て國難突破に邁進しなければならぬ状態となつてから、近衛首相はしばしば其の意見を發表して、此の非常時局を乗り切る爲めには、單なる形式的協力では駄目である。眞の積極的な國

民的支持が確立されなければならぬと云ふ事を力説し出した。一方に於て山本英輔大將、頭山滿翁、一條實孝公の三長老の名に依つて、既成政黨の即時解消と一國一黨的政黨の樹立が提唱されて政界に大きなショックを與へた。さうして此の頃から、又も新黨樹立運動が再燃し多くの策士達に依つて、種々の暗躍明動が開始せられたのである。さうして此の間にあつて、馬場内相の急逝に依り、之に代つて従來革新勢力の中の最も有力なる頭目視せられて居た末次信正大將が、内相の椅子に座る事になつた結果は、革新派の新黨運動の分子に、非常に大きな力を與へる結果となり、新黨運動は益々活氣を呈して來たのであつた。形式的協力形態から眞の舉國一致的形態に移る爲めには、現在の既成政黨を解消して眞の一國一黨的の新政黨を樹立するほかはない。近衛首相にして、自ら其の黨首として出馬するの意志を明かにするならば、既成政黨の即時解消に依る大合同も不可能ではないと云ふやうな説が頻りに流布せられた。近衛公の意動くと見て、既成政黨の連中は俄かに狂奔し初めたのである。然しかうした政策を中心とせずして單に人を中心としての動きに對しては、近衛公は胸中不快を感じずには居られなかつた



そこには主義主張と云ふものよりも、政權をめぐる功利的な氣持ちが主となつて動いて居る事が感ぜられたからである。又近衛公側近の人達は、近衛公を新黨運動の渦中に捲き込ませて其の政治的生命を傷つける事を、極力回避せしめようとしたし、近衛公自身も亦自分の性格や健康から考へて見て、政黨の首領たる事の不適任なる事を自認して居た。更に又荻窪會議以來の近衛公をめぐる革新的分子は、さうした單なる既成政黨の大合同に依る新黨と云ふが如きものは、たゞ表面の看板を塗りかへるに過ぎないものであつて、其の中味が何等異なるものではない以上、新黨としての意義を成さないものとして、之に反對の色を示した、さうして近衛公は遂に出馬の意志を明かにしなかつたのである。しかし自分達の行詰つて居る、政治的生命の局面打開に狂奔して居る既成政黨の連中の策動は、容易にやまなかつた。一部の者は近衛公が出馬出来ないならば、近衛公の後援の下に末次内相を擁立して衛黨を樹立しようと計畫した。又政友會の宮田光雄氏一派の如きは、同志六十餘名を集めて、中島鐵相の出馬を促したりした。新黨運動はやむにやまれぬ勢となつてしまつたのである。

かゝる情勢の下に於て、近衛首相は新黨問題に對しては全然白紙の態度をもつて、今議會にのぞんだ。今議會には國家總動員法案や電力管理案や農地法案等々と劃期的な革新的意義を有する法案と未曾有の尤大な戰時豫算案とが提出せられて居た。近衛首相としては、此の尤大な戰時豫算案と種々の革新的法案とが、各政黨の無條件的な支持に依つて、すらくと通過出来るならば、その事だけで、今日の時局に對する我が國の舉國一致的な決意を對外的に示す事が出来るかと考へて居た。さうしてそれに大きな期待を持つて居たのである。然るに審議を開始して見ると、既成政黨の連中は、あらゆるいやがらせを試み、舉國一致的な政府支持の誠意は少しも見えなかつた。議會内の空氣は次第に險惡化して來た。遂に總動員法案の委員會に於て、一政府委員から「黙れ！」と云ふやうな罵聲が放たれるやうにさへなつて來た。さうして電力管理案の如きは遂に危機に瀕して來た。

この形勢を見て近衛首相は憂慮禁ずる事が出来なかつたのである。又閣僚達の心中も誠に穩かならざるものがあつた。末次内相や鹽野法相等は解散の斷行を強硬に首相に進言さへしたの

である。此の時になつて近衛首相はいよいよ新黨組織に出馬の意志を決定したらしいと云ふ説が頻りに傳へられ初めた、如何に近衛公の聲望をもつてしても政黨に基礎を置かぬ以上、圓滿に其の政策を遂行することは出来ない。議會に何等の基礎を持たなくては、何かにつけて政黨の恫喝にあひ、其の度毎に政府としては、膝を屈して政黨側の鼻息を窺はなければならぬ。かりに議會の解散を斷行するとしても、與黨をも持たずして何等の準備なくして解散しても意味をなさない。先づ新黨をつくつて其の上で解散を行はなければならぬ。革新的な國策を着々と實行するには、どうしても議會に強力なる政黨を持たねばならぬ。現在の政黨は國民から其の信用を全く失つて居るし其の内部的統制力は全く失はれて居る。此の際斷乎として衛黨樹立に乗り出せば、四方風をのぞんで之に参加して來ることは必然的である。さうすれば政界の空氣も一變して來るし、舉國一致の體制も完全に整へられて來る。近衛首相も漸くそこに氣がついて、今度こそはいよいよ新黨樹立に乗り出す肚を決めたと云ふのである。

こうした説は政府の内部からも放送された。近衛首相と親友の間柄である木戸文相までが「そ

れは尤もな話である。近衛首相としても、自分の一身上の事ばかり考へて居る譯ではない。どうしても必要とならば新黨運動にでも何でも、場合に依つては身を挺して乗り出して來るであらう」と云つて、かうした風説を裏書きするやうな口吻を洩らした。そこへ持つて來て、近衛首相と最も親しい間にある前田米藏氏が、いよいよ近衛公は出馬の意志を決定したと云ふ情報を齎した。此の情報は、政民兩黨に非常なショックを與へた。さうして政民兩黨は突如として一大旋回運動を行つた。兩黨は舉黨一致で政府を支持する態度を改めて決定した。若し新黨が出来るならば舉黨一致で之に参加すると云ふ事を申し合せた。同時に黨内に於ける各人勝手の新黨運動を禁止すると云ふ事になつた。かくて電力案を一舉に通過させてしまつたのである。これですしにも險惡な空氣をはらんだ議會も、大風一過無事に終了してしまつた。近衛首相の新黨出馬と云ふ一聲で、總ての行きが、りも問題も一舉に解消して、萬事はすらくとすんでしまつたのである。誠に微妙を極めた動きがそこにあつたのである。

然し議會は終つたが、今日に至るまで近衛首相に新黨出馬の意志ありや否やは依然として不

明である。當時傳へられた近衛公が新黨に出馬すると云ふ風説は、やはり單なる風説であつて眞實なものでなかつたのであるか、其れとも近衛公は當時は一應出馬の意志を固めたのであるが、其の後政黨側が其の態度を一變して、舉國一致で政府を支持する方針に出たので、其の必要がなくなつたとして、決意を翻したのであるか。其れとも又、險惡なる議會の空氣を一掃し議事の行詰り状態を打開する爲めに、木戸文相や前田米藏氏等が、故意に斯くの如き説を放送して、解散斷行、新黨樹立、近衛公出馬と云つて、浮き腰の政黨側を牽制したのであらうか、それらに對しては、見る人に依つて各其の意見を異にして居る。然し近衛公の新黨運動に對する態度は、終始一貫して白紙であつたことは事實であると思はれる。

當時に於ける政民兩黨側の狼狽と混亂よりは大變なものであつた。近衛公の出馬確定と見て前田米藏氏は中島知久平、島田俊雄の兩氏を抱き込んで、此の際一切の行さがりを捨て、新黨樹立に乗り出さうとして運動を開始し、島田俊雄氏は鳩山一郎氏を訪ねて熱心に鳩山氏を口説いた。一方民政黨でも櫻内幸雄氏は町田總裁を訪ねて「今度はどうもほんとうらしい。今から

民政黨としても、之に對處する準備をしておかねば……」と勸告した。然し鳩山氏はかねてから親密な間柄である近衛公を、歸朝後しばしば訪問して懇談して居り、そして公の口吻から近衛公に新黨へ出馬の意志絶對に無しと見て居た。然し彼はそれを知らぬふりをして、島田氏等の近衛公出馬説を信ずる如く見せかけ、若し新黨が出来るのなら、其の時は舉國一致で之に參加しよう、其の代りそれまでは當分各自の勝手な新黨運動や解黨運動を禁止すると申出で、巧みに逆手を用ひて黨内の統制を回復する方法に出た。

又町田總裁は近衛公出馬説に對して、其の眞偽を確かむ可くひそかに元閣僚の某貴族院議員を通じて木戸文相に近衛公の心境を打診してもらつた。それに對する木戸文相の答は「ノー」であつた。こゝに於て町田總裁は、鳩山氏と手を握り、此の際政民提携の強化を最も必要なりとして、兩者提携して、兩黨内の新黨運動や解黨運動を抑壓する手段に出た。即ち町田總裁と鳩山氏は、近衛公の新黨出馬説に對して、兩黨内の新黨運動の分子が、之を信じて狂奔して居る間に、近衛公に新黨出馬の意志なきことを確かめ、寧ろ議會後の近衛公狂冠説を信じて、此の

際政民提携を強化し、舉國一致の身構へをなし、以て次期政權に待機せんとする方針をとり、逆に兩黨内の新黨運動や解黨運動を封じて、統制を回復せんとする方策をとつたのである。議會後に於ける、政民兩黨主腦部の懇談會の如きは、此の方策の延長の現れである。かくて、再燃した新黨運動は三度び暗から暗へ其の姿をかくしてしまつたのである。

#### 四、近衛首相の苦悶と末次、鹽野兩相の動き

新黨運動は終始一貫して、近衛公を中心として動いて居る。近衛公が若し新黨の黨首として出馬の意を決しさえすれば、新政黨の樹立は必ず出來ると人々は見て居る。そして衛衛公が出馬しなければ、當分新黨樹立の望みはないと見て居る。従つて新黨運動は、近衛公の意動くと見れば忽ち活潑となり、近衛公に其の意志なしと見れば又忽ち消え去つてしまふのである。然し乍ら近衛公自身としては、さうした單なる人を中心としての離合集散に依つて出來上る新政黨と云ふやうなものは、何等意味のないものであるとの見解を持して居るのである。公として

はこうした何等イデオロギーの統一もなく、共通の政策もなくして、たゞ單に個人的な聲望と勢力を中心として動いて居る新黨運動の如きは、一種の政權運動に等しいものとして、寧ろ反感をさへ持つて居るものと見られる。こうした連中の新黨の黨首になることは、單に表面の看板を塗りかへただけで、中味は少しも變らぬ團體を新黨と認めてやり、彼等の行詰つて居る政治的生命を救済してやり、彼等をもう一度政權に近づけてやるだけの事にきりならない、さうした道具に使はれることは、公としては眞平御免であるし、又さうした結果になることは公の平素の理想に全然相反することなのである。

然し近衛公は、新政黨樹立の必要を何人よりも最も痛感して居る。現在の非常時局を乗り切る爲めには、單なる形式的の協力では駄目である。眞の舉國一致でなければ駄目である。而して之に對しては、眞に革新的な指導的勢力を結成し、之を中心として積極的な國民全體的の支持を確立しなければならぬと信じて居る。此の眞の革新的な指導勢力の結成、それを新政黨の樹立と見て居るのである。近衛公はファッショではない。現に近衛公は議會中に於ても、我が



に有力な人物を描へるだけでは何もならない。どうしてもそこに積極的な國民的支持の基礎をつくらなければ駄目である。此の意味から新政黨の樹立はどうしても必要である。然し既成政黨の離合集散に依る單なる表看板を塗りかへただけの新政黨では何もならない。どうしても眞の新政黨をつくらなければならぬ。然しそれは容易な事ではない。問題は再び新黨問題に返つて來る、近衛首相の煩悶は益々深まるばかりである。そこで動き出したのが末次内相と鹽野法相の二人である。此の二人の閣僚が改めて又新黨運動に奔走したのである。頭数は少くてもよい。眞の革新的分子だけを集めて先づ新政黨を樹立しよう。さうして之を次第に擴大強化して行つて、理想的な新政黨にまで育てあげよう。こうした考へから二人は立ち上つて動き出し初めたのである。

### 五、新黨は果して樹立されるか

從來新黨樹立に働きかけて居た分子には二つの流れがあつた。一つは政界上層部の進歩的な

分子が主となつて、廣く人材を社會一般に求め、既成政黨の中からも、比較的純眞な分子を引き抜き之に依つて理想的な新政黨を樹立し、之を基礎として、合法的な國政革新を行はんと計畫したものであり、他の一つは、現在の權威と勢力とを失墜してしまつた政黨を、もう一度昔の全盛時代にかへし、あはよくば政權にタッチし、其れが出来なくても、自分達の行き詰つた政治的生命の延命を圖る爲めに、改めて新政黨を樹立して之に参加しようとするもので、つまり舊黨の再編成としての新黨運動を計畫する者である。荻窪會議の一派は前者に屬するものであり、既成政黨内の現状打開論者の多くは後者に屬するものである。即ち前者は政界の現状を憂慮して、國政革新の爲めに、新政黨を樹立せんとするものであり、後者は一身上の立場を顧慮して自分の政治的立場を有利に展開せんが爲めに、新政黨の名を利用せんとするものであつて此の兩者の出發の動機は全然相反するものがある。然るに一度び新政黨樹立の機運が動き初めると、この後者に屬する連中は、我れも〜と先きを争つて新黨運動に奔走し初めた。新政黨に若しも便乗しそこなつて、置去りでも食つては大變たとばかり、俄かに新黨々と騒ぎ初め

たのである。さうして次期政權をねらふ策動にも、自己の政治的・生命の延命策としての妄動にも、乃至は黨首脳部に對する不平運動にも、悉く此の新黨運動と云ふ名を冠し初めたのである。どんな不純な動機から出發した運動であつても、新黨運動と云ふ名を冠しさへすれば、それが立派な革新運動の如き感を與へ、正當化されるやうな感を呈して來たのである。

こうした傾向に對して、眞面目な新黨運動者は頗る不快の念を抱き、返つて次第に新黨運動から手を引くやうな結果を來したのであつた。今日荻窪會議派に屬する一派が、新黨運動に對して、最も冷然たる態度をとつて居るやうに見えるのは、全くこのためである。既成政黨は革新せられる對象である。其の既成政黨の連中が、身の程を知らず、自ら革新を唱へ新黨の樹立を叫ぶこと滑稽な話はない。こうした連中と混同視されることは、眞面目なる新黨運動者にとつて、到底堪へ得るところではない。新黨樹立の聲が高まるにつれて、眞面目な新黨論者が次第に新黨運動から手を引くに至つたのは誠に當然な事である。そこで眞の新黨を樹立せんが爲めには、こうした不眞面目な連中を全然除外して、たとへ少數であつても、眞の革新的な分

子を中心として、眞剣な新黨運動を起さなければならぬ。そこで末次内相と鹽野法相の二人は、從來既成政黨のやり方にあき足らずして、率先して政界の革新を提唱し、少數乍らも果敢なる闘争を續けて來て居る、所謂小會派の一部の分子を中心として、新黨樹立を計畫せんとして動き初めたのである。

然しかうした計畫にも種々の問題がつかまつた。即ち從來の行きが、りから、この計畫にも色々な異分子が入り込んで來る事を免れなかつた。眞の革新分子の外に札付の政界の策士達も集つて來た。所謂黨人的の人物も參加して來た。さうして之等の異分子が互ひに其の指導的地位を占めんとして排斥し合つた。革新分子のみを中心すると頭數が揃はなかつた。頭數を揃へる爲めに黨人的分子を包含することには革新的分子が反對であつた。こうした問題に對しては、末次内相と鹽野法相の間の意見も必ずしも一致しないものがあつた。それに假りにも新政黨として旗上げするのに、僅かに三十名や四十名の人を集めただけでは、面目にかゝはると云ふやうな意見もあつた。即ち新黨々と騒ぎまわつて居たが、出來上つたものを見ればこん

なものかと云はれて、却つて世人の期待に反し、同情者を失望させ、之が爲めに新黨擴大の機運を削がれる虞れもあると云ふ事も考慮された。又一方に於て少數の新黨に革新の看板を獨占される事をおそれる、政民二大政黨側の牽制もあつた。かくて此の運動も目下行き惱みの状態にある。

かく見來る時、新黨の樹立と云ふことは、殆んど絶望の如くにも感ぜらるゝ。誠に新黨は政界の蜃氣樓であつて、近寄つて見れば忽然として其の姿をかくす捕捉し難いものであるやうにも思はれる。然し乍ら新興國民勢力の結成に依る新黨の樹立と云ふことは、時代のやみ難き要求である。時代は、さうして今日の非常時局は、さうした新黨の樹立を要求してやまないものである。恐らくさうした新黨が實現せらるゝまでは、新黨運動は繰り返し繼續して行はれるであらう。さうして殆んど收拾す可からざるものゝ如く見ゆる混亂状態と、絶えざる陣痛の産みの苦しみの裡から、遂には待望久しき眞の新黨が生れ出て來るのではないか。政治の動向は時の流れに支配される場合が多い。今日の非常時局の下に於て、國民的精神の高揚が

或は一舉にして理想的新黨を樹立せしむる事となるかも知らない。

混沌たる現在の情勢の下に於て、我々は新黨の胎動を何となく、しかし力づくよく感ずるやうな氣がするではないか。

(終り)



銀座書房の新刊パンフレット (各定價三十錢) (送料三十錢)

東日記者	北條清一著	防共護國團事件
大毎記者	横山五市著	少年航空兵
日大教授	世耕弘一著	時局を動かす人々
法制局参事官	樋貝詮三著	國家總動員法解説
法學博士	武田鼎一著	厚生省の機構
讀賣記者	野口昂著	全體主義的の日本精神論
	村田孜郎著	世界の爆撃機
	阿武隈次郎著	廣東と香港
	野口昂著	新政黨の胎動
	中野正剛著	世紀の翼・航研機
		日本國民に訴ふ(十五錢)

パンフレットの製作代輯を引受けます

どんな種類のパンフレットでも、業務用、宣傳用、記録用その他一切の目的に使用されるパンフレットの製作及び代編輯をお引受けいたします。内容によつては發行の御相談にも應じます。小社はパンフレットの製作に關しでは優秀なるスタッフを以つて奉仕、御満足を得る確信があります。

御照會は下記 銀座書房

東京市四谷區荒木町四  
電話四谷二四五八番  
振替東京五七七六番

昭和十三年六月十日印刷納本  
昭和十五年六月十五日發行

不許  
複製

新政黨の胎動  
定價金拾錢 (送料參錢)

著者 阿武隈次郎

發行者 大野木繁太郎

東京市四谷區荒木町四

印刷者 加藤保

東京市神田區三崎町二ノ一二

印刷所 株式會社 加藤文明社

東京市神田區三崎町二ノ一二

東京市四谷區荒木町四

發行所 銀座書房

電話四谷(35)二四五八番  
振替東京五七七六番

最高の内容・最低の代價

銀座書房の新刊パンフレット

讀賣新聞東亞部長

村田 孜 郎 著

定價十錢  
送料三錢

# 廣東・香港

長期抗日の本據、極東の機密室を視る

東京市四谷區荒木町四

發行所

銀座書房

電話四谷二四五八番  
東京五七七六番

5  
15